



始まりは奇妙だった。

ある施設で怪物が出たという噂が起きた。

最初は噂だったけど次第に実際に遭遇する者が現れる。

そして怪物と遭遇したとされる者は
発見されると見るからに
骨抜きにされた状態で発見される。

被害者は揃って

天女に会った

という事をうつとりとした瞳で
うわ言のようにつぶやき続けているという。

アダマンティウス・リベラティオが
この件について調査を行ったところ、
被害者がマールゴ特有の媚薬ガスで
酩酊状態にされていると判明し、
マールゴハンターが派遣される。

だが現れたマールゴは凄まじいスピードで動き、
神出鬼没で空間転移の能力を保有していると思われ、
マールゴハンター達は返り討ちにされてしまう。
だがマールゴハンター達は怪我こそ負わされたものの、
それ以上の事はされず、
気が付くとマールゴはいなくなっているというのだ。

その後2度マールゴハンターの部隊が出動するも
結果は同じという事から
敵は手練れの上級マールゴと判断され、
クラス5のマールゴハンター、
アイシヤが派遣されたのだった。

（案外あっさり出てきたね。）

アイシヤが施設内を進み最奥に到達すると、そのマールゴがいた。マールゴはフワフワと帯のようなものを纏わせ、確かに遠目に天女と言われるのも分かるような風貌をしていた。

「いらっしゃい、マールゴハンターさん、お一人かしら？」

マールゴは自宅への訪問を歓迎する口ぶりでアイシヤに声をかける。

「まあね、所であなたは色々暴れてるみたいだけど、大した被害が無いのはどうゆう事かな？」

「？、もしかして人間を食って殺す真似つて事かしら？ フワフワ、わたくしがそんな野蛮な事をするなんてありえせんわ。」

「もしかして人間を襲うのが嫌とか？、もしそうなら人間と共存してみない？」

「ふうん、人間と共存…ですか…。」

「そうそう、もしその気があるなら私が相談に乗るから考えてみない？」

「何を勘違いしているのかは知りませんが、わたくしにとつて人間は、そうですね。……ああ、うきだしでしたっけ？」

人間が食事をするお店で出すという、あれですね、なので食事にもならない連中と生きるなど、まっぴらですわ。」

「そっか、じゃあこれ以上被害を出す前に私が始末するね。」

言うや否やアイシヤは二瞬で、マールゴまでの距離を詰め、強力な二撃を放とうとするが、マールゴはそれを上回るスピードで回避する。



「いいですわあ、貴方、とっても強いのでしょうかね、クラス4ですか？それとも5？」

「クラス5だけど、それがっ！どうした！」

次いでマールゴに攻撃を放つアイシヤ、
だがマールゴはその攻撃を回避し続ける。

「素晴らしいですわ！」

その瞬間、目の前のマールゴが消える、
一瞬困惑するアイシヤの背後から

「お待ちしておりました、
強大な力を持つマールゴハンターさん。」

「!?この！」

「そうですわよね？」

姉さま。

背後からの声に振り返り様に裏拳を放つが、
更なる声が別の方向から聞こえる。

「う……!?くっっ！」

その不意打ちに二瞬の間が生まれ、
気付くと地面と空中に現れた光る円盤から
現れた拘束具の様な物にアイシヤの
手足は捕らわれていた。



鎖に引かれ不自然な体制で拘束されたアイシヤの背中に
マールゴが纏わりつく。

「…2体…？、連携してたのか…」

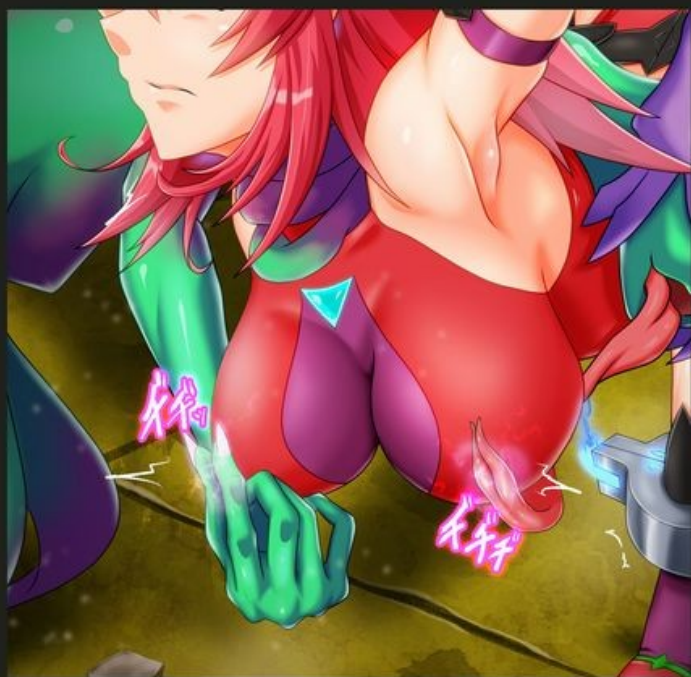
アイシヤに絡みつく1体とは別に
こちらを見下ろす同じ形をしたマールゴ、
これまでの空間転移と思われていたものは
2体の連携によるものだった。

「ふっ、くっ！」

拘束を外そうと力を込めるアイシヤ、
しかし拘束具は内側が柔軟で、
アイシヤの手足にしっかりと密着していた、
加えてそれらを繋ぐ鎖も頑強でアイシヤの力でも
すぐには壊れそうに無かった。

「その鎖は簡単には壊れませんわ、
さてそれでは味わわせて頂きましょうか。」





「oooooo」

マールゴがアイシャの体を弄り始めると触られた部分から
ジンとした感覚が広がる。

「ふふふ……」

「……」

マールゴの指と舌が乳首と股間等の敏感な部分に触れると
刺激が寄り鮮明になる。

（電気か……）

「ふふ、お気づきの様ですわね、
気持ちいいのを我慢しなくていいんですよ?。」

マールゴの指がアイシャの乳首を優しく転がしていくと
次第に固さを増し始める。

（このままではマズイね……よし。）

エネルギーを開放する範囲攻撃を用いれば
1体は倒せるかもしれないが、
一定時間能力が使えなくなってしまう。
その状態であるスピードへの
対応が難しいと判断したアイシャは。

「うつつらあああつ!。」

「!?、きゃつ!。」

力いっぱい鎖を引きそのままに破壊してしまっただ。

「まあ、なんて力なのかしら？、ねえ姉さま？」

「そうね、でもわたくし達の理想でもあるわね、姉さま？」

（そんな手に引つかかるか!!）

アイシヤに取り付いていた方のマーゴは、すぐさまアイシヤから距離を取る。そして2体は別々の場所に移動し、今度はアイシヤを前後から挟み撃ちにしようとする、

アイシヤは1体の方へ突撃しながら後方へ射撃を行う。熱線に驚き回避したマーゴの動きが止まり、挟み撃ちを回避したアイシヤの拳がもう1体に振り下ろされるが、

「なっ!？」

「わたくしを甘く見ないでくださいまし。」

確実に仕留められる位置、動きも完全に読んでいた、にも関わらずマーゴがアイシヤの前から消え、背後を取る。

「はあっ!!……っ!？」

しかし背後に回られる事を予測したアイシヤは動揺する事無く背後に拳を振るうが、

その拳にはどこからか現れたのか、先程の拘束具が絡みついていて、

「甘く見ないでと言いましたよね、ふふふ。」

「ム…。」

先程と同じ体制で拘束されるアイシヤの体を
マールゴが再び弄ぶ。

「今度はわたくしの番でいいですわよね、姉さま？。」
「勿論ですわ姉さま。」



「さつきと、違う?。」

先程の電気と違う刺激がアイシヤの体に広がる、

「わたくしの震え、如何かしら?」
姉さまとは違った気持ちよさがあるでしょう?。」

「くっ...。」

「もう気持ちよくなってきましたか?、うふふふ。」

マールゴがアイシヤの乳首を軽く摘まんだ瞬間、
アイシヤの体がピクンと跳ねる。
先程のマールゴに浴びせられた電流は
強力では無かったものの、アイシヤの体の中に残り
その影響で過敏に反応してしまったようだった。

「貴方のような高クラスのマールゴハンターは、
きつと沢山の場合を踏まれているのでしよう、
なればこそ、その美しい身体は
マールゴの官能によつて淫らになつていても
おかしくありません。
ですが恥じる事はありません、
それは貴方の勲章のような物なんですよ?。」

「こいつら随分とお喋りだな...んくっ...。
それに、手馴れでる。」

アイシヤの背筋をくすぐるような触手の動き、
確実に捕らえた獲物を
少しづつ官能へと誘う女性マールゴ特有のものだ。

「敏感で美しいお背中ですわよね。」

「時間をかけるわけにはいかないね。」

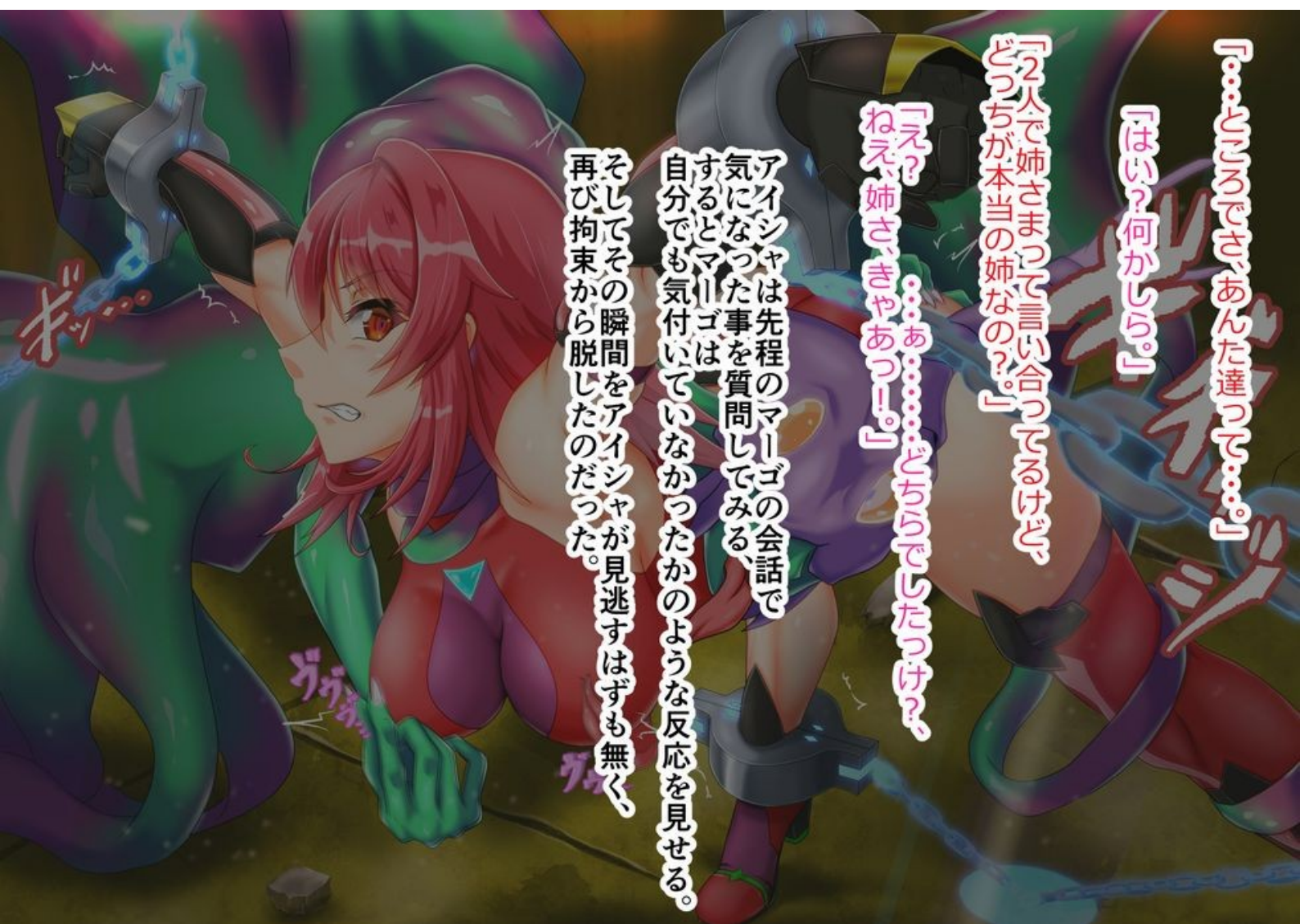
「……ところでさ、あんた達って……。」

「はい？何かしら。」

「2人で姉さまって言い合ってるけど、
どっちが本当の姉なの？」

「え？……あ……どちらでしたっけ？、
ねえ、姉さ、きやあつ！」

アイシヤは先程のマーゴの会話で
気になった事を質問してみる、
するとマーゴは
自分でも気付いていなかったかのような反応を見せる。
そしてその瞬間をアイシヤが見逃すはずも無く、
再び拘束から脱したのだった。



「よっし!」
(頭が悪くて助かった。)

「もっつ、ズルですわよ、
わたくし達に精神攻撃なんて!」

頬を膨らませ可愛らしく抗議してくるマールゴ、
しかしそんな事はアイシヤには関係なく
返答もする必要無しと黙っている。

「無視は酷いのではなくて!」

アイシヤに無視されたのが不満なのか、
より一層怒り出してしまいうマールゴ。

「もう怒りました、
わたくし達本気でいきますからね!」

(ここから本番、一気に片付ける!)

向かってくるマールゴに
アイシヤは改めて臨戦態勢を取る。







『……なあ……』

『うっかまえたよ、これで8回目ですわうふふ。』

「この罠、一体いくつあるのよ……っ。」

同じ拘束具に同じ体制で拘束されたアイシヤが呻く。

その後のマールゴとの戦闘は、アイシヤは兎に角素早いマールゴに手を焼くが、だんだん動きが読めたと思いきや、攻撃を仕掛けると、絶妙なタイミングで罠が起動し拘束されてしまう。

何度も同じ罠に掛けられる為、状況を変えようと一旦撤退を試みたりもしたのだが、動きが読まれているとしか思えないタイミングで出口付近でまた拘束されてしまった。

「んあっ!」

繰り返す罠に捕らわれ、この罠がこの室内にどれだけ仕掛けられているのか? そう思い打開策を思案している隙を縫って与えられた乳首への刺激にアイシヤの身体が反応し、思わず喘ぎ声が出てしまう。

「っふふ、大分反応がよろしくなつてきましたわね、痺れて、震えて、蕩けできましたか?」

「……っ。」

アイシヤを拘束する度に電気と振動を与えるマールゴが交互に繰り返すアイシヤの肢体に甘美な刺激を送り続けてきた。

決して強い刺激ではないが、何度もマールゴのテクニクと共に与えられた刺激は、確実にアイシヤの官能の扉を開かせつつあった。

「姉さま、この拘束具、掘り出し物ですわね。」

「そうですね、お値段のわりに丈夫ですし、何より拘束の仕方が素敵ですわね、絶妙に力が入り辛くて屈辱的な体制が良いですわね。」

（賭けだけど、この状況をなんとかしないと、ジリ貧になる。）

ここは自身の破壊エネルギーを範囲放射してこの状況を打開するしかない、そう考え始めるアイシャ。

しかしその技は大量のエネルギーを一度に消費してしまうので使った直後最低でも10分はバリア以外の能力が使えなくなってしまう欠点があった。

1体が離れているので同時に倒すのが難しいのだがこのままでは埒が明かないし、どうやらこのマールゴはこういつた罠を仕掛ける事に長けたマールゴらしい。

「それでは姉さま、そろそろ2人でこの方を見定めましょうよ。」

「いいですわね、姉さま。」

離れていたもう1体がアイシャの元に近づいてくる、チャンスはここしかない、もし同時に倒せなくても放射で床に穴を開けてそこに一旦隠れ体制を立て直そう。

そこまで算段したアイシャはアニマウエポンに力を送ると赤く発光し始め、――

（今だっ！）

ゴッ

イキ



「うっああっ!!」

「……え……」

「……なんで?……」

アイシヤの力が放出されようとしたその時、
マールゴがこれまでよりも少し強めの電気を
アイシヤの体に流した。
すると発動寸前だったアイシヤの力の
輝きが消えてしまう。

「ふふ、この位ですわね、分かりましたよ、貴方の流れ。」

「……なにを、した?。」

「生物の体には常に無数の電気信号が流れています、
マールゴハンターと言えどそれは例外ではない。」

「わたくし達はその電気信号に干渉出来ますのよ、
勿論、各々の電気量は違いますので
すぐにとはいきませんが、
時間を掛ければ必ず突き止められますのよ。」

「マールゴハンターと直接繋がっている
アーマウエポンとてそれは例外ではありません、
貴方が何かしようとしていたのでは
邪魔をしてみたのですか、
うふふ、成功の様ですね。」

「くっ……ならっ!。」

アイシヤの体からエネルギーが噴き出す、

マールゴの言う事が本当でも

二度に大量のエネルギーを放出すれば

たとえキャンセルされても、

そこまで放出した分で

マールゴにダメージを与えられる、

ハズだった。



「ふふ、もう力が入らなくなってきたでしょう？、
震えと痺れが際限無く蓄積していきますからね。」

「あん……ふぁ……もうやめろ、んん……」

ゾクゾク

ゾクゾク

ゾクゾク

ハハハ

ハハハ



「んっ……くあ……。」

「実はわたくし達、元は一つだったんです、でもマーゴハンターに体を2つにされてしまったの。」

「でもこれっぽっちも恨んでいないの、

このままだと能力は限られるし

元の力の半分も無いのです、

その代わり出来る事が増えて

むしろ感謝しているくらいなの。」

「でも実はわたくしが元の力を使える方法が

一つだけありますの

それはお互いが接触する程近づく事なんです、

ほら今わたくし達しつかりと合わさっていますでしょ?。」

縛り固定された部分から

ジンとした感覚が広がる、

その感覚に痛みは無く、心地好い刺激で、

アイシヤの意思とは裏腹に

体の芯から力が抜けていつてしまう。

「如何ですか?

先程までと比べ物にならないくらい

心地好い痺れでしょう?。」

「それでは。」

「んんう!、なにを、あう♡!。」

2体のマーゴは力が急激に弱まっていた、それでも抵抗しようとするアイシヤの両乳首にしゃぶりついた。

「三つふふ。：わたくしの能力は、舌から最も効果的の注射器にまはさるの、乳首とクビはビリビリは念入りで注ぎましたから、しばらくはトリビリスでいれざるわよ。」

「ふはぁ♡…は…ふえ…♡ん…あ…♡♡」

ヘリオデイクスの囁きに反論しようとしたが
アイシヤだがその回からは
甘く蕩けた呻きが漏れ
まともな言葉が紡げない。

「確実に気持ちよさが体を巡っていくでしょう？
ほら、もう蕩けた声が抑えられなくなってますよ。」

ふふ、貴方は快楽に負けて気持ちよくなると
舌が出てしまっんですね、可愛いですよ。」

「…そんなところぁ…んえ…あむ…ひぁ♡♡…。」



「痺れと震えの流れも分かるでしょう？、
そしてそれが体の芯に溜まっていく
感覚も分かるのではないかと？」
それが貴方と
とおつづても気持ちよくしてくれますよ。」

「ほらもっと体の感覚に集中して、
頭の中を空っぽにして
気持ちいいもので満たしましょう。」

「は……あ……う……あ……は……う……は……は……は……」

「でもまだイクのは我慢ですよ？、
この快感を簡単に発散してはいけませんよ。」

「でも貴方は堪え性が無いですからね、
そこはわたくしが管理致しましょう、
安心して全てお任せください。」







「姉さま、上手くいきましたわよ。」

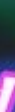
「まあ、素晴らしいですわ姉さま、アニメウエポンを取り外すなんてわたくし達にしか出来ない事ですわね。」

「ええ、そうですね、それにしてもこのアニメウエポン取り外されて尚抵抗してきますわよ。」

「アニメウエポンは戦士の気高き精神そのものと言いますからね。ですが……んちゅぷ。」

ちやうど

4



ビクシ

ハハハハハ

アイシヤを捕らえ快楽で侵したマーゴ、ヘリオデイクス。

2体にして1体の特殊な生体を持つ上級マーゴは多くのこだわりを持ち、その為の試行錯誤を惜しむことなくまたそれ可能にする能力を持っていた。

高クラスのマーゴハンターをその能力である快楽を伴う振動と電気と執拗な責めで体の芯まで蕩かし抵抗力を奪ったヘリオデイクスは、アイシヤの腰に装着されたアニマウエポン、メデューザを取り外してしまった。

「んふっ♡…ぶぁ…♡…そ…りえ…わら…し…の…。」

ヘリオデイクスの接吻から解放されるも上手く舌が回らないアイシヤは今起きた出来事に驚愕していた。

アニマウエポンはマーゴハンターから生み出されるもので、装備というより自分の体の一部と言ってもいい。

特に自分のアニマウエポンは装着型でも更に特殊なものなので、マーゴに破壊される事はあっても自身の体から離れたまま形を維持する事など出来ないはずなのである。

ガクガク

「クスクス、大人しくなさい。
それではこちらはしばらく預からせていただきますね。」

どうやらメデューザはヘリオデイクスの手の中にあっても
マーゴに抵抗する為のエネルギを発していたようだったが、
ヘリオデイクスの手から電撃を注入されるとそれも停止する、
大人しくなったアイシヤのアニマウエポンをヘリオデイクスは
巨大な羽の二部を開き内部に収めた。

「はふ…は…は…はっ♡…ふぁっ♡♡♡」

本来であれば抵抗するであろうアイシヤだが、
彼女の体は何か抗っているように硬直したり、
時折甘い喘ぎと共にビクビクと震えたりを繰り返している。

「撫でるだけでこんなにお尻を震わせて、フッフ、
…良い頃合いでじょうか?」

「はう♡♡♡!?!、ひゃめ…、ひゃめっ♡♡へっ!」

お尻を撫でられビクンと反応するアイシヤの耳元で
ヘリオデイクスの通告にアイシヤが懇願めいた拒否反応を示すが、

「ダメです、情けない事を言わないでくださいな。」



「あぁっ！ おっ！ おうっ！」

「……」

「お……あ……はふ……あ……」

「いじですわね。」







鎌首をもたげた肉数珠が再びアイシヤのアナルへと侵入していく

その表面には潤滑性能が高く快樂電流の伝送率を上げる粘液が塗られているとはいえ、肉数珠によって広げられてしまったアナルは侵入の際に更に広げられても容易に凶悪なそれを飲み込む。ムニユンという肉玉が通過する音がする度に背筋を流れるビリビリとした電流にアイシヤの思考が侵されていく。

「わたくし達、アナルを弄られた人間の反応が大好きなのですが、普通の人間ですと下品な話、酷い粗相をしますでしょう？」
人間のそういう匂い、嫌いなのですが……。」

「マーゴハンターの方達は任務の際に体の中の全てをエネルギーに変換するという技があるという事を耳にしまして。」

「それを聞いてわたくし達、運命を感じずにはいられませんでした、しかしながらクラスの低いマーゴハンターですと、残念ながら粗相をしてしまう方も多かったです。」

「しかし貴方の様な高クラスのマーゴハンターならばその心配は無いだろうと思っただのですが、わたくし達の期待通りでしたわ。」

へりオデイクスの自分語りも再び全ての肉玉を飲み込まされた今のアイシャには殆ど届いていない。

連なる肉数珠はそれぞれが異なる振動と電気を発していて
その多重の波は重なり絡み合い、文字通り体の内部から快感で
アイシヤの全てを蕩き解そうとしてくるのだ。

意識を保とうとしてもほんの少し気を緩めるだけで意識は桃色に包まれそれが中々戻ってくれない、

どこかに逃がそうとしても快楽の発生源が体の中では逃しようが無く、アイシヤは成すがまま、逃れる術がないままにこの底なし沼のような悦楽に晒され続ける他ないのだった。





「ひゃああっ♡♡♡んああっ♡♡♡:人ああっ♡♡♡!!」

「はあく満腹ですわ。」

「少々下品な作法になつてしまいましたが、時にはこういう食事の方が美味であるというのは、もう二つの新しい発見でしたわね。」

ヘリオデイクスの食事が終わリアイシヤが拘束から解放される。

だが苛烈な責めを繰り返され凄まじい勢いで全でのエネルギーを吸いつくされてしまったアイシヤは意識を失つてしまい、糸の切れた人形のように地面に転がされる。

「ところで姉さま、どうやらわたくし達の子供達が生まれたようですわよ。」

「あら！、本当ですか！、見せてくださいまし！」

嬉しそうに微笑む視線の先、

そこにはヘリオデイクスの体表と同じ色をした肉の繭のような物体があり、その三部が割けるとそこから小さな膨らんだヒルのような生物が顔を出した。

その生物は体から生えた帯のような器官を細かく震わせると宙に浮かぶ。

「まあ、可愛らしい子達。」

ヒルのような生物は繭から何匹も現れ最初の1匹に続くように繭から飛び立ちベリオデイクスの方へと向かい周りを嬉しそうに飛び回る、そんな小さな生物達を愛おしそうに眺めるベリオデイクス達。

「本当ですわね……、そういえば姉さま、アニメウエポンの方も出来ましたわよ。」

「ふふ、では早速試してみましよう。」

もう二人のベリオデイクスは触手を開き先程奪い収めていたアイシヤのアニメウエポン、メデューザを取り出す。

彼女の腰にアニメウエポンを装着させると、

まず股間の部分が破れたままの戦闘着が再び現れる、

続いてベリオデイクスの指先から電気を流されるとメデューザが起動し光の帯が溢れだす。

だがそれはアイシヤが普段使っている鮮やかな黄色ではなく、濁った黄色をしており、全体に明滅する奇妙な桃色の光が浮かんでいた。

「アニメマウエポンのクラッキング、成功ですわね。」

「三部成功、ですわ。この方のエネルギーが戻れば制御は簡単に取り返されます、でも今の空っぽの状態ならばこの位はできますわよ。」

アイシヤのアニメマウエポンの制御を二時的に制御下に置いたヘリオデイクスが指を振るとメデューザから更に多くの帯が溢れ出す。それは意識を失ったアイシヤの体中に絡みつき縛り上げていく。そして帯の三部が天井に絡みつく、と彼女を宙づりにしてしまった。

群がる幼生はアイシヤの汗や体液を求めるように
小さな口でむじやぶりつく。

それはアイシヤのエネルギーが限りなくゼロになっている為
そうするしかないかったのだが、
アイシヤのエネルギーが少しづつ回復し始めると必然、
吸い取りやすい部分を中心に集まり出す。

ぽっぴりと開いた股間の二つの穴や拘束され閉じた腋に潜り込まれ、
ついばまれ吸い上げられるとアイシヤの口から
舌足らずな喘ぎが漏れる。

刺激自体は小さいが、これまで体に溜め込まれた
催淫振動電気がアイシヤの全身の感度を凄まじく上昇させている、
幼生の軽いひと吸いが耐えがたい快感に変換されてしまうのだ。

「ふえはぁ♡♡♡♡♡っはへぁぁっ♡♡♡♡♡」

アイシヤの体はこの状況でも快感に耐えようと抗っていたが、
ぼやけた意識の伴わない防壁は舌を強く吸われた刺激がトドメとなって
崩壊し絶頂を迎える。

「ふふふ、たんとお食べなさい、？、…あら？。」

「どうされました、姉さま？。」

「姉さま、これはどういう事でしよう？。」

アイシヤに群がる幼生の数匹の体に黒い斑点が浮き上がり始める。

その斑点は次第に大きくなるとそこから幼生の体が崩れ始め、最後には動かなくなり落下すると地面につく前には灰になって消えた。

「？、この方が抵抗し始めたのでしょうか？。」

「いえ、まだそこまで回復はしていませんわ、今吸っているエネルギーは上質ですが人間のそれと変わらない筈ですが…。」

「という事は…これは、失敗…ですわね。」

「そのようです、やはり母になるのは難しいですわね。」

「まあ、残念ですが仕方無いですわね、次は頑張りましょう、姉さま。」

「そうですわね、姉さま、ではもうお暇しましょうか、あとこの実験場はもう引き払った方がよいでしょう。」

今も次々に崩壊し朽ちていく我が子達に対しての何の執着も無いかのような態度。

ヘリオディクスにとっては気になった事を試して結果が得られる事が何よりも重要で、結果さえ得られればそれで満足なのだ、一つの失敗程度は次の参考にしても反省する事は二切無い。

そしてここですべき事を全て終えたヘリオディクス2体はこの拠点を放棄する準備を始める。

「アニメマウエポンの方は貴方のエネルギーが回復しましたら制御を取り戻せるでしょう、今回はここまでが限界でした。」

「なので後は自力でどうにか出来ると思います。」

まあ今はこの子達の吸う量が多いのですぐには難しいでしょうが、クスクス。」

「それではご機嫌用、マーゴハンターさん、またどこかでお会い出来たら嬉しいですよ、貴方のエネルギーとつても美味しかったですよ。」

撤収の準備を終えたヘリオディクスは満足した表情でアイシジャに別れの言葉を残し悠々とその場を後にするのだった。

その後、マーゴの言う通り、
1時間経つと幼生達の数が減った事で
アイシヤのエネルギーの回復量が吸収量を上回り始める。

ある程度エネルギーが回復すると
乗っ取られていたアニマウエポンの制御も簡単に取り戻す事が出来、
信じられない程簡単に、独力で脱出する事が出来た。

だが今回の件でアニマウエポンを二時的にはあるが
敵に乗っ取られるという、

通常あり得ない事態に
アイシヤは言い知れぬ屈辱を感じていた。

この雪辱はいつか晴らす、そう決意したアイシヤだった――。

ヘリオディクス

その昔は自身の体を依り代に生成した結界内でのみ超高速移動が出来る能力と、振動と電気を合わせた高い攻撃力を持つ上級マーゴだったが、ある時マーゴハンターに敗北し、体を2つに割かれてしまう。

普段から結界の為に自分の身を分けていた事が幸いし偶然一命をとりとめる。しかし体は分かれたままになり戦闘力は下級マーゴレベルにまで落ちたのだが結界内の高速移動能力は強化され瞬間移動レベルにまで至る。

現在はその瞬間移動能力で結界内におびき寄せた相手を攪乱し、戦闘力を補う為に手に入れた数々のトラップを使い絡め手を多く用いて捕縛する戦法を得意としている。

2体の思考は常に共有されており、元々の好奇心旺盛で気になったことは試さないと満足出来ず、その為には手段を択ばない性格は2体になった事でより助長されてしまっている。

外見はほぼ同じな為、見分けが付けづらいと指摘を受け自分達を姉妹という事にし区別してみたのだが、思考の共有の所為と実際はあまり重要と思っていない事なのでどちらが姉か妹かをすぐに忘れてしまう。

様々な性技やアニマウェポンの掌握術等様々な事を試しているが、現在一番力を入れている事柄は、

その才能と素質が一切無い自分がマーゴの母になる事である。

